

一里の道のりが人生の原点



長久保赤水自画像 協力：高萩市教育委員会

「長久保赤水」という存在が、以前から気になっていた。『安南国漂流記』を表し、『東奥紀行』では関ヶ原の龍燈についても書いている。伊能忠敬より前に質の高い日本地図を編集し、幕末には、吉田松陰が赤水の墓を訪ねたという。でも武士ではなさそう。

学者だろうか。その経歴や仕事をみると、才能に溢れている、とても枠にはめることなどできない。そんな赤水のことを知りたくて、生まれ故郷の高萩市赤浜を訪ねた。

元)に亡くなった。八十三年八月の生涯だった。その時代は、徳川幕府だと、八代將軍吉宗から十一代の家斉、水戸藩は五代藩主宗翰から六代治保にあたる。農民として生まれた赤水は私塾に通って勉学に励み、六十歳のとき侍講(先生)として、治保に直接

講義するようになる。農民出身者が侍講になるのは初めてのことだった。そのころの水戸藩は財政が逼迫し、藩政改革を求められていた。父が酒におぼれて自死し、十五歳で藩主になった治保は、郡奉行を四人から十一人に増やして農民の生活状況を調べさせた。そうした奉行的な川に皆川純純がいて、赤水を見出すことになる。

赤水が皆川に提出した「芻蕘談」という意見書がある。「芻は草、蕘は木のことで、「草刈りや木を切る者の話」という意味を込め、あくまで農民の立場にこだわった。そのころの農業は労苦ばかりのしかかってきて、間引きが横行していた。農業を離れて商人に鞍替えしたり、博打を生業とする渡世人になる者があつた。百姓一揆も起こった。赤水は「芻蕘談」のなかで「七年の病気に三年のよもぎ」ということわざを例に出し、すぐに結果が見えなくても何年かあとには効果が出るはず。日々、人の命を救うことを考える藩政を敷くべき、と訴えた。さらに、七十歳以上に食料を与えている新発田藩のことを例に出し、「だから農民たちは親の長寿を願い、親孝行をしている」と付け加えた。赤水の見識は治保の侍講になってさらに生かされ、治保が進める、農政改革の中核を担っていくことになる。

侍講が終わったあとも、文化や学問に力を入れていた治保から「大日本史」の地理志編纂を命じられた赤水は江戸に留まり、八十歳になってやっと赤浜に戻った。街道筋にあり海に近い赤浜は、いまま当時の面影を残している。肉親をすべて失い、継母の勧めで通った私塾。その一里(4km)の道のりが赤水の原点だった。そこで仲間たちと語り合い、切磋琢磨して儒学を深く学んだ。持ち前の好奇心は天文学や地理学へと発展し、世界が広がった。しかも自らの見聞をより多くの人に知ってもらうために地図を作り、本を出した。そして最終的には藩政にまでかわり、農民たちの暮らしをよくするために一役買った。

若くして天涯孤独になったこともあるのだろう。赤水は子どもたちを大事にし、江戸から頻りに手紙を出した。その子孫たちがいまも、赤浜で暮らしている。広大な敷地は常磐線と6号国道に分断されてしまったが、静かに目を閉じると当時の風景が立ち上がってくる。

主な記事

戸惑いと嘘⑤
内山田 康

2.3

もりもりくん①
カタツムリの観察日記 松本 令子

11

ぼくの天文台Ⅱ
ひかるもの 粥塚伯正

12